

人間の尊厳にもと づく市民運動を！

竹本昇

1 会の自殺行為

私が関わってきた旧三会が、「アジアから問われる日本の戦争」展に参加したことで、私は、問題を生み出した当事者の一人として責任を問われ、厳しい試練に会うことになりました。

しかし、旧三会は戦争展に関わる意見の対立や人間の尊厳にかかわることについて、多様な意見を協議し合意をつくりだす努力を放棄し、会の独善的な運営を貫きました。

それは、多様な意見を尊重しつつ、共同の意思を築き上げていく市民運動にとって、自殺行為に等しいものと言えます。

2 旧三会の問題点

(1) 尊厳を冒すこと

旧三会では、Sさんが、30年余り一緒に活動をしてきた斉藤日出治さんに対して、「剽窃」者だと泥棒呼ばわりして、斉藤日出治さんの歴史の叙述の誤りを取り出して、斉藤さんを歴史の偽造者にデッチ上げることに躍起になりました。

Sさんは、斉藤さんに質問を繰り返して回答を強要することを続けながら、自分の都合が悪いことには、ほっかむりして、自分への質問は無視し続けました。

Sさんにとっては、斉藤さんが、斉藤さんの専門とする経済学の分野で、植民地支配・侵略戦争の観点からの経済学を構築しようとしたことよりも、斉藤日出治さんを「剽窃」者や歴史の偽造者にデッチ上げることの方が大事だったのです。

そんな会の運営に対して、私をはじめ他の支援者は会議の開催を求めました。

しかし、原則的な会の運営を主張していたKさんは、最後は原則を通すことをせず会議が開かれませんでした。

Kさんのことについて言えば、Kさんは私に事実を大事にすることを強調した人でした。

そのKさんは、私が事実を主張しているのに捏造したと決めつけ、事実を確認しようとしませんでした。

旧三会は、SさんやKさんの独裁的な運営により、会議を開くことが妨げ

られました。

私は、この人たちを正義の実践者と信じて30年間、一緒に活動してきたのでした。

Sさんが斉藤さんを「剽窃」者だと泥棒呼ばわりし、歴史の偽造者にするとは、斉藤さんの人間としての尊厳を冒すことの極みと考えています。

尊厳を冒すことを考えられない組織に未来はなく希望は持てません。

(2) 旧三会が「戦争」展を阻止しようとしたこと

反戦・平和・戦争責任問題に取り組む各団体が保管している写真パネルや資料を展示する「アジアから問われる日本の戦争」展が企画されました。

私にも責任がある当時のA会は、私が代表となって、この実行委員会に参加しました。

しかし、途中から、「民衆運動の深化を妨げるもの」と規定して戦争展を阻止しようとした。

この方針は間違いました。弁解がましいですが、当時の私も斉藤さんも戦争展を阻止するという意識はありませんでした。

関東大震災朝鮮人虐殺から3年後の1926年に、日本人が三重県熊野市で二人の朝鮮人を虐殺した本事件は、「天皇(制)のもとにすめられた日本の植民地支配とそこからつくりだされた朝鮮人差別が原因でした。」と

碑文に刻み込んだA会の活動を多くの人に知ってもらうことを、民衆運動の深化の妨害だという誤った規定をしたのです。

朝鮮の故郷から遠く引き離されて紀州鉾山で亡くなった朝鮮人とその子どもたち、「なげ命を失わなければならない」のかをあきらかにし、その歴史の責任を追及していきます。」と誓って活動する会の展示物を多くの人に知ってもらうことが、どうして、民衆運動の深化を妨げることになるのか。

他の参加団体においても、自分らが一生懸命になって取り組んでいる活動の展示物を出展することが、「民衆運動の深化を妨げる」と言われても、反発心こそ湧くものの、とても共感できる訳がありません。

(3) 旧三会が他の市民団体の尊厳を犯したこと

旧三会の「アジアから問われる日本の戦争」展に対する誤りは、それだけではありません。

A会は、実行委員会に参加している各団体に、戦争展案内チラシ2に対する批判文と質問文を送りました。

この文書を送ることによって、「アジアから問われる日本の戦争」展実行委員会への参加団体が、参加しなくなる」と確信して送られました。

このような文書を送って、「戦争」

展の開催を阻止しようとしたことは、戦争に反対し平和を願う多くの市民の良心を尊重しない傲慢な態度であった点で誤りでした。

それに前後して、旧三会は、チラシ第2案が印刷発注される前には反対意見を述べずにおいて、印刷が発注された後に反対意見を述べました。

このアンフェアな行為に、当時、「戦争」展実行委員会のMさんから質問を受けましたが、A会は無視しました。

(4) 旧三会が異なる意見の相手との対話を拒絶したこと

批判とは、自分の意見を相手に押し付けるのではないし、意見の異なる相手を論破することではありません。

批判とは、異なる意見の相手と理解し合うものでなければなりません。

そうでなければ、批判は民衆運動の分裂の具となってしまいます。

批判とは、異なる意見の相手と信頼関係を築いて共闘関係を築くために為されるべきです。

そうでないと、批判は対立関係の具となってしまいます。

そのため、批判とは、相手に自分の意見を押し付けるのではなく、相手の言葉を自分の言葉で理解し、自分の言葉を相手の言葉に変えて説明することなければなりません。

ところが、旧三会のチラシ2にたい

する批判は、分裂・対立を生む批判でした。

例えば、旧三会の「アジアは地域名である。人は問うことができるが地域は問うことはできない。地域は何かを見ることはできない。」という批判は、歴史学においては正しい用語の使い方からの批判ではあっても、民衆の心に響く批判ではありません。

これ式の批判でいくならば、日常用

また、旧三会は、「第1案にあの醜悪な絵一枚を選んだ思想・感性をそのまま維持しているのではありませんか。」と問いかけていますが、一番肝心な「思想・感性」については、A会は一言も説明せずに、チラシ2の文言を批判しているため、一番大事な「思想・感性」の問題であることを提起しながら、批判する相手に対して、何の理解も得られず、何の接点も持てない批判になっています。



追悼広場前の巨石 (紀和町)

語としての「川が流れる」という表現を、川の水が流れるだけでなく川を築いている堤防までもが流れることを意味する、と理解するようなもので、これでは庶民感覚を無視した批判となり、とても受け入れられるものではありません。

さらに、旧三会は、「『国民国家日本の侵略犯罪にかかわる諸問題（『慰安婦問題』、『強制連行問題』、『住民虐殺問題』、『資源略奪問題』……）は、国家間ではなく日本国家の問題であり、社会的正義の問題であり、歴史的責任を有する

国家の国民がナショナリズムを克服することが問われている問題です。」と批判しています。

旧三会の言うとおりです。

問題は、旧三会が市民運動の側にこの認識がないと批判するのであれば、この現実から解決の方途を探るべきでした。

とすれば、認識を共有していく取り組みとして、ナショナリズムを克服する展示を提案するべきであって、「民衆運動の深化を妨げる」として阻止するという対応では、批判し相手を叩きのめすだけになってしまいます。

それでは、本当の解決にならず正しい民衆運動とは言えません。

協同で事を行う場合、誤りだから潰してしまうのではなく、さりとて、相手の誤りに妥協するのではなく、協同の道を探り、それでも協同が不可能なら脱退するべきであって、相手を潰してしまうことであってはならないと思います。

(5) 天皇の戦争責任を問う取り組みを旧三会こそが提起すべきであった

「アジアから問われる日本の戦争」展が開催された2019年4月30日は、

天皇の「退位礼正殿の儀」が行われる日であり、この日に反天皇制をテーマにした集会を開こうとしない「アジア

から問われる日本の戦争」展は「民衆運動の深化を妨げる」、というA会の規定は正しいと思います。

しかし、それならば、「アジアから問われる日本の戦争」展を阻止するのではなく、天皇の戦争責任を問うことをテーマにした具体案を「アジアから問われる日本の戦争」実行委員会に提示して、協同作業を実現する行動をとるべきでした。

阻止という方針では、天皇の戦争責任を市民に知らせていくという大事な機会を潰してしまうことになります。

とりわけ、日本中が天皇賛美一色で染められているときに、旧三会は、「木本事件」で虐殺された二人の朝鮮人に対して、戦争展を阻止することで応えることが正しかったのか、それとも、戦争展に参加する多くの人に天皇の植民地支配・侵略戦争責任を知ってもらうことで応えることが正しかったのか。

「(天皇(制))のもとにすすめられた日本の植民地支配とそこからつくりだされた朝鮮人差別が原因でした。」と熊野の追悼碑に刻んだ旧三会が、展示よりも戦争展を潰すことを優先したことは、左翼セクト主義の誤りを繰り返して、自分らの社会的責任としての天皇の戦争責任を明らかにすることを放棄したことになります。

現実から出発して、そこから創造していくことをせずに、自分の意見と違うからといって相手を破壊していくことを目的とする運動は、民衆運動とは

いえません。

今回の旧三会の「アジアから問われる日本の戦争」展を阻止しようとしたことは、以上に述べた理由で間違っていたのであるから、旧三会は「アジアから問われる日本の戦争」展の実行委員会の皆さんに謝罪するべきだと思います。

3 人間の尊厳を大事にする会でありたい

(1) 人間の尊厳は、冒しても冒されてもいけない

市民運動は人間の尊厳を大切にすること、それが人間の尊厳を踏みじける正反對の運動になっしまっていて、わたしは何が正しいのか解らず、自問する毎日でした。

体重は7kg痩せ、物事に集中できなくなり、朝起きられず午後4時ごろまで床から離れられない日がありました。

私は鬱を発症し、連れ合いは私の鬱で胃潰瘍を患う羽目になりました。

幸い、これを心配してくれた皆さんのお蔭で、鬱は快復に向かいました。

この経験を通して、私は、尊厳は冒すことも冒されることも認めてはいけないということを基本に据えて、今後も、活動に参加していきたいと考えてよりなりました。

(2) 改組三会の出発に際して望むこと

私にとつての改組三会の参加は、以上に述べてきた問題の解決を求めていることです。

そこで、私は、次の4点をみんなで議論して、「改組三会」として出発することを望みます。

- ① 「旧三会」の弊害を整理すること。
- ② 「アジアから問われる日本の戦争」展と「旧三会」の問題点を整理すること。
- ③ 「改組三会」は、前記の①と②を踏まえて、分裂を乗り越える組織論の理念を創造すること。
- ④ 次の世代を担う若い人が魅力を感じる組織とすること。

以上の4点を、みんなで議論して出発することを、改組三会のみなさんに望みます。

2021年1月3日